

# のしろ児童館だより

小松市北浅井町1号21 TEL・FAX 22-6430 平成23年4月号

## 働いた報酬は？

苗代校下は、農村地帯です。昭和30年代までは、ほとんどの家庭が農業だけで生計をたてており、稲作と藎草がその収入源でした。

子ども達が夏休みに入る頃から藎草の刈り取り作業が始まります。子どもも朝5時前から起きて田んぼに行き、昨晚化粧泥をつけておいた藎草を干していきます。子どもが親に渡し、親が扇形に広げて、広場や道の端、家の前など、よく乾くところにずらりと干していきます。朝食も田んぼで食べます。祖母がおにぎりなどを運んできます。干し終わると、9時ごろになっています。それから一休みして、午後の一番暑い2時ごろから、干した藎草の取り入れ作業が始まります。がんがん照りつける真夏の太陽を背中に受け、ふらふらになり、汗をしたたらせながらも、子どもは藎草を集めていき、親が集めた藎草を束にしていきます。取り入れ作業が終わると、さすがにくたくたになって、子どもはぐだぐだ休んだりしていますが、親は休む間もなく、集めた藎草を「一番藎草（長くてよい品質のもの）」と「二番藎草（短くて畳表にはならないが、加工の仕方では花莫産などにはなるもの）」により分ける作業をします。うとうと眠っている耳にも、「カンカン」というより分ける金具のぶつかる音が聞こえてきます。夕方5時ごろから、今度は「夕刈り」が始まります。親が藎草を刈り取り、子どもが束にし、集めて、化粧泥をつけるのです。その作業は、夏の日がとっぷり落ちてあたりが見えなくなるまで続きます。まだ機械化が進んでいない昭和40年代までは、このように多くの農家では、親も子も泥にまみれ、体力の限界まで働くのでした。藎草がお盆近くにようやく終ると、8月の後半からは稲刈りです。もちろん子どもも貴重な労働力です。

このような毎日ですから、夏休みの宿題などできるはずもなく、最後の3日間に仕事を免除してもらって、片付けるのです。「毎日ノート1ページの勉強」という宿題があった時は悲惨でした。40日分を3日間で片付けるのですから・・・

親に、「こんなに働いているからお駄賃がほしい」と言いますと「子どもが家の仕事をするのはあたりまえや！」と叱られ、お駄賃がもらえるどころではありませんでした。

昔はこのように子どもも「一家の労働力」であったのに、今は、子どもは一家の「お客様」になっているのではないのでしょうか？たまたま洗濯物をたたんでもらったり、トイレの掃除をしてもらったり、このようなことを子どもにさせている方もありますが、そこでお駄賃をあげる、などという話を聞くと、「何たることか！」と腹立たしく思います。子どもは一家のお客様ではなく、家族の一員です。ですから家のことをするのはあたりまえです。あたりまえのことにお金を出していると、どんどん何かの報酬をもらわなければ何も出来ない子、しない子になります。そしてそのことが家族のために働くことの価値や喜びを低め、卑しめ、家庭の中での自分の役立ち感を失わせることになります。

働いた報酬は、「お前がいてくれて助かったよ。ありがとう。」この言葉で充分ではないのでしょうか？子どもに物をあげることは、たとえ飴玉1個でも慎重に考えるべきです。